

赤壁の戦い 上

半村良・原典

吉田親司

三国志 白衛隊

THE SELF-DEFENSE FORCE IN THREE KING
BATTLE OF RED CLIFF 1



THE SELF-DEFENSE FORCE IN THREE KINGDOM SAGA BATTLE OF RED CLIFF 1

赤壁の戦い 上

半村良・原典

吉田親司

目衛隊 三國志

世界文化社

プロローグ 落日の武漢

- 1 到着 — 7
2 内乱 — 16
3 地震 — 21

第1章 江夏の悪夢

- 1 漂着 — 29
2 三兄弟 — 55

第2章 三顧の礼

- 1 要害 — 66
2 伏龍 — 80
3 再訪 — 94

第3章・・・初陣

- 1 三顧——102
2 博望坡——130

第4章・・・樊城攻略戦

- 1 丞相——147
2 落城——156
3 空爆——168

第5章・・・長坂橋の死闘

- 1 軍師——180
2 難民——189
3 賢母——194
4 脱出——201
5 鬼神——205
6 特使——218

天津光照……………●陸上自衛隊3佐。自衛隊武漢派遣PKF部隊の指揮官。

伊庭遙佳……………●陸上自衛隊1尉。武漢派遣PKF部隊の副隊長を務める。

木曾城司……………●陸上自衛隊普通科所属の3曹。デジタル機器に強い。

平本介次……………●陸上自衛隊通信科所属の2尉。歴史に造詣が深い。

浅場勝彦……………●陸上自衛隊普通科偵察部隊所属の2曹。

有藤 宰……………●陸上自衛隊普通科所属の1曹。遠距離狙撃の名手。

真崎伸也……………●陸上自衛隊機甲科所属の2尉。一〇式戦車部隊を率いる。

河原 岬……………●陸上自衛隊衛生科所属の医官。凄腕の外科医。

小橋保治……………●陸上自衛隊警務科所属の3尉。

魯和深……………●国際連合の外郭団体から派遣された通訳。

ダニエル・ケイシー……………●米海軍大佐。LPD（フライング・タイガース）艦長。

馬懿柱……………●『北中華人民共和国』人民解放軍空軍大校。

劉備……………字は玄德。中山靖王劉勝の後裔で漢王室の復興を目指す。

関羽……………字は雲長。劉備・張飛の義兄弟。知力と義侠心に溢れる豪傑。

張飛……………字は翼德。劉備・関羽の義兄弟。怪力と勇猛心を誇る豪傑。

劉表……………● 荊州刺史。流浪の劉備たちを客将として受け入れる。

孫權……………● 字は仲謀。孫堅の次子で孫策の弟。呉王となる。

曹操……………● 字は孟德。献帝を傀儡とし、漢王室の丞相として権勢を揮う。

曹仁……………● 字は子孝。曹操軍の将軍。

夏侯惇……………● 字は元讓。曹操軍の将軍。隻眼の猛将。

曹洪……………● 字は子廉。曹操軍の将軍。

張遼……………● 字は文遠。曹操軍の将軍。

夏侯淵……………● 字は妙才。曹操軍の将軍。夏侯惇の従兄弟。

于禁……………● 字は文則。曹操軍の将軍。

時の歩みは三重なり。

未来はためらいがちに接近し、
現在は弓矢の勢いで飛び去り、
過去は永久に静止するものなり。

フリードリヒ・フォン・シラー

プロローグ 落日の武漢

1 到着

統合と分裂。

端的に表記すれば中国史はそれに尽きよう。

富と貧。武と和。生と死。

相反する要素は雲集し、攪拌された。そこに

は不均衡と歪みが生じた。是正や根治を志す者

は利権という魔手に抹殺された。地震や洪水と

いった天災でさえ、実は人災の意味合いも色濃

く滲ませていた現実が露呈すると、暴動という

火の手が地方に生じた。

一部の不満分子を肅清すれば現状を回復できる——そう信じた施政者は、権力で国民感情をねじ伏せようと試み、そして失敗した。

やがて醸造された不和が一定の熱量に達したとき、中華の大地は戦乱に塗り潰され、天下は麻の如く乱れた。

二一世紀前半。アジア大陸東岸に位置を占める中国は、大国ゆえの自重に耐えきれず、自己崩壊を始めていた。北京政府は引き締めを図ったものの、わずか一〇年で国家としての体裁を保てないまでに零落してしまった。

これは取り立てて奇異なことではない。

有史以来、この広漠たる大地には幾多の王朝が生まれ、滅びていった。連綿と繰り返されてきた誤算がまた再現されただけにすぎない。

むしろ一党独裁政権のもとに統一されていた

半世紀が異常だったのであろう。戦争と戦争の間に生まれる有閑こそ、平和と呼ばれるものの正体なのだから。

だが、一つだけ過誤があつた。

今回の異変には何者かの意志が介在していたのである。

時に西暦二〇××年一二月八日。

この日――。

古往今来、人類を試してきたゝときのかみゝは再び快樂の賽子を振ろうとしていた……。

＊

武漢。

湖北省の省都であるこの街は揚子江こと長江の中流に位置している。河川海運の要衝である

と同時に華中屈指の工業地帯でもあつた。

造船や電子部品など重工業も盛んだ。不夜城の趣を感じさせる都市であつたが、現在はずっかり荒廃してしまい、見る影もない。一時は八五〇万人を超えた人口も、その一〇分の一に満たないまでに激減していた。

理由はただ一つ。戦乱である。

三国志の時代より武漢は戦略上の拠点と見なされていた。どれほど軍事技術が発達しようと地政学の宿命からは逃れられない。乱が生じると、戦火に焼かれるのは必然だった。

現在、中国には三つの政治組織が勃興し、互いに対立していた。

北京を根拠地とし、人民共和国の正統後継者を唱える『北中華人民共和国』。

香港を首都に定め、台湾をも融合した広州軍

区が覇を目指す『中華合省国』。

奥地の重慶と成都を母体とし、格差は正と農民解放を目論む『内陸自治戦線』。

各軍区の戦力を取り込み、師団規模の正規戦を演じられるまでに成長した彼らは、我こそが正統中国なりと主張しあっている。

そして、ここ武漢は内戦状態に陥った中国における要石と目されていた。

三竦みとなった軍事勢力が角を突き合わせる最前線こそ、この都市なのだ。

もともと武漢は三鎮——すなわち武昌、漢陽、漢口が結ばれて誕生した複合都市であり、現在でも市街は大きく三つに分割されたままだった。

長江によって縦に切断された東側が武昌区であり、西側は支流の漢水でさらに南北に隔てら

れている。その北部が漢口区、南部が漢陽区だ。

各ブロックは長江大橋や江漢橋で接続されていたが、それら橋梁は「武漢籠城戦」と呼ばれる攻防の結果、一つ残らず破壊されていた。現在河岸の随所にはバリケードと監視所が設けられ、無断で渡河を試みる者を阻んでいる。

つまり市街は河を境に分断されていたのだ。

相対する軍勢は今のところ平穏を保っているが、一触即発の雰囲気に変わりなかった。

何かきっかけさえあれば、三つの勢力は銃撃を始めるだろう。

そして、この日——。

事態打開と緊張緩和を目的として、荒廃した漢陽区の市庁舎に掲げられた旗があつた。

日本の国旗、すなわち日の丸である。

一部の中国人民が怨嗟の視線を注ぐ日本が再度中国大陆へ侵攻したわけではない。日の丸の横にはためく国連旗がその証拠となってくれよう。

陸上自衛隊は国連平和維持軍として中華の大地に足を下ろしたのである。

そう。平和を強制するために……。

ようやく戦場に乗り込んだというのに、そこは奇妙な静けさに包まれていた。

天津光照3等陸佐は不可思議な安堵と幻滅を同時に感じていた。

心ない人々から「違憲の軍隊」と蔑まれてきた自衛隊が、ようやく中国大陆に第一步を踏み出し、日の丸を掲げたのだ。それなりの期待と責任を担っているのは事実。こちらは治安維持

を目的とするPKF部隊にすぎないが、銃声の一発くらい聞こえてもよいではないか。

彼は三四歳。戦争体験のない自衛官である。必ずしも好戦的な人物ではないにしても、この街にたどり着くまでの紆余曲折を思えば、危険地帯に足を踏み入れたという張り合いが欲しかった。

中隊長である自分の気分が緩むと、自動的に部下たちもだらける。そうなれば危険度は跳ね上がる。これは演習ではない。限りなく実戦に近いのだ。

自分には陸上自衛隊武漢派遣PKF部隊の現場責任者として、二二名の自衛官を無事に日本に連れ戻す義務がある。それを忘れてはならない。

天津は陣地構築に汗を流す部下を見つめた。

経験と度胸に優れた精鋭を選抜したもの、い
かんせん数が少なすぎた。天津もまた役職上は
中隊長に過ぎなかった。

階級から言えば大隊を任されてもおかしくな
いし、必要とされる戦力としては大隊はおろ
か、旅団単位でも足りないほどである。

しかし、漢口区を武装占拠した、北中華人民
共和国解放軍を過度に刺激するのは好ましくな
いとの政治判断により、派遣兵力は一方的に削
減されてしまった。

現場を知らない永田町の論理に振り回された
陸自だが、恒久有事法の成立後、数度の海外派
兵を経験した彼らはそれなりにしたたかになっ
ていた。軍事音痴おんちから脱却できない政治家を尻
目に、装備品の面では贅沢ぜいたくな編成を実現化して
いる。

とは言っても、肝心の頭数は一個中隊強の戦
力。これでは抑止力としては機能しえない。

この部隊は第一陣に過ぎず、これから陸続と
増派戦力が送り込まれるとの観測もあったが、
真実かどうかは天津3佐にも不明だった。

天津は防衛省における制服組であり、背広組
とは一線を画す立場にあった。残念ながら出世
コースに乗っているわけではない。

防衛大学を悪くない成績で出たものの、厳格
すぎる性格が災いし、昇進は遅れ気味だった。
後ろ盾や縁故もなく、努力のみで地歩を築いて
きた者にありがちだが、天津もまた己と他人に
厳しすぎた。部下からは畏怖の対象になると同
時に慕したわれもしたが、上司からは単に疎うとまれ、
煙たがられた。

今回の国連平和維持軍派遣も栄転やキャリア

を積むための選抜ではない。むしろ厄介払いという意味合いが大きかった。いつの世も正論ばかり言う者は疎外されるのだ。

天津光照3佐は自嘲気味に思った。

(たった二二二名でどうせよと？ 戦端が開かれたなら全滅は必至だ。我らに可能なのは身を守ることだけではないか。上層部は何を考えている？)

懸念材料はほかにもあった。アメリカ国内で勢力を増している中国処罰論である。

内乱が続く中国は国体が判然とせず、どの政治組織を相手に交渉をしてよいか他国からは判断できない状況だった。核のスイッチに誰が指をかけているのかもまったく不明だ。これを放置するのは生存を放棄するも同じ。手荒な手段を用いてでも、一挙に治安を回復させた方がよ

い。

華南に軸足を置き、民主化を標榜する『中華合省国』からも支援要請は届いていた。平穩を回復するためなら、国土の半分が焼かれてもやむなしと。

あながち暴論とも呼べないような意見が力を増すにつれ、アメリカは本格介入の構えを示し始めた。

さりとて大義名分なしに攻勢を仕掛けるのは合衆国といえども難しい。大量破壊兵器を隠していたと難癖なんくせをつける手段は、すでにイラクで実践済みだった。

ならば方法の一つだけ。アメリカ人か、もしくは同盟国が血を流せばいい。

軍人ならなお結構。大衆はすぐに怨嗟えんさの声を上げ、復讐に同意するだろう……。

吐き気をもよおすような近未来だった。天津3佐は堅く誓った。政治の都合で生贄にされてたまるものかと。

天津は盛り土の上に立っていた。そこからは長江の様子が一望できる。彼は決意も新たに猛禽のような視線を対岸に投げた。

北の漢口区には敵対勢力が旅団単位の軍勢を置いていたらしいが、ここからでは確認できない。彼らは半壊した街並みに身を潜め、総攻撃の命令を待っているのだろうか。

いっぽう東の武昌区には友軍と目してよい勢力が地歩を固めていた。棧橋で力強くはためているのはアメリカの星条旗だ。

そこに横付けし、荷揚げ作業に追われている巨艦の姿が確認できた。

それは天津たちをここまで運んでくれたドック

ク型揚陸艦だった。合衆国海軍太平洋艦隊所属のLPD（フライング・タイガース）である。

満載排水量一万五八〇〇トンの大型艦は、威容を誇示するかのように対岸に陣取っていた。

もちろん日米が反目しているわけではない。陸自も、そして米軍も、国際連合の一員として取りあえずの安寧をもたらすため、この武漢にやって来たのだ。

河川で三つに分けられた市街には、指揮系統がそれぞれ異なる勢力が布陣し、互いに睨みをきかせている。こうすれば偶発戦闘は避けられよう。

（……詰まるところ人類はパワー・バランスの構築でしか平和を築けないらしい。だが、模造品としての安寧が長続きするかどうかは誰にも判るまい。

三疎^{さんすく}みとなつて平穩を勝ち取るか、それとも三つ巴^{みつぱ}となつて乱世を演出するか……)

不穩な考えに至つた天津3佐は、己の職責を全うすべく振り返つた。そこには頼れる副官が踵^{かかと}を揃え、きちんと敬礼していた。

「中隊長。ヘフライング・タイガース」艦長のダニエル・ケイシー大佐より連絡が入りました。本日一八〇〇に到着を祝して夕食会を開くゆえ、ぜひ出席してほしいとのことです」

伊庭遙佳^{いははるか}1等陸尉だった。

武漢派遣^{ぶかん} P K F 部隊の副隊長を務める女性幹部である。年齢三八歳。周囲の意見を見無視して退役を拒んでいるのは、まだ三歳の子供を養うためであつた。

伊庭1尉はシングルマザーなのだ。

身長一七五センチ、体重六五キロ。腕にも足

にも筋肉の鎧^{よろい}をまとい、体格に似合わない機敏な動きが身上であつた。女子プロレスの団体から何回かスカウトが来たのも頷^{うなづ}けよう。

もともと通信部隊出身だが、彼女は火器全般に通じていた。銃剣格闘と短剣格闘を統合した武器技術では、満点に近い成績を修めている。また実家が武術道場であり、槍術^{やうじゆ}はかなりの腕前だった。

今回の出陣に際し副長として伊庭を指名したのは天津本人だった。産休で休んだ一年間を差し引いたとしても出世は遅い方だが、そのぶん経験は積んでいよう。また英語と中国語に通じているのも心強い。

「ケイシー艦長もようやく任務を果たし、一息つきたいでしょう。どうか中隊長はご出席ください。留守は副長の私が守ります」

伊庭の声に、天津は首を横に振った。

「いや。丁重にお断りしてくれ」

夕食会か。この半年ずっと同じフネで過ごし、似たようなモノを食ってきた間柄ではないか。いまさら何を話すことがあるものか。

アメリカ人は戦地においても自分の世界を確立したがる。これが悪癖だという事実には彼らは気づいていない。イラクとイランで演じた失敗のうち、それが原因だったパーセンテージは少ないのに。

「最初から戦闘単位として機能している軍艦と違い、こっちは陣地設営と部隊展開を終えないと戦えないのだ。その点を強調すれば、ケイシー艦長も解ってくれるだろう」

有無を言わさぬ口調で告げると、天津は司令部が置かれた大型テントに向かった。占領地な

らば適当なビルを根拠地にするところだが、この地区の高層建築物はほとんどが戦闘で全半壊しており、近づくことさえためらわれた。

住民全員は避難を終えており、武漢の街はどことなく寂しげだった。長江からの風が頬を撫でる。妙に生暖いのが気になった。

「真冬なのに蒸すな。重慶や南京と共に、中国の三大ストーブ」と称されるわけだ」

そう言った天津3佐に、伊庭は知識を総動員して答えてくれた。

「お言葉ですが、これは異常気象の範疇はんしゅうです。武漢における一二月の最高気温は一〇度強。しかし現在は一八度もあります。地球温暖化の影響がこんなところにも現れているのでしょ

う」
「詳しいな。ずいぶん勉強したね。その勤勉ぶりはいつか君を助けるはずだ」

「いえ、偶然です。私を育ててくれた祖父が大分市に住んでいたのです。私も中学までそこで過ごしました。大分と武漢とは友好都市関係を結んでいます。私は若干情報が入りやすい環境にあったのです」

「そうか。だが謙遜も過度だと嫌みになるぞ。覚えておきたまえ。」

ともあれ昨日まで空調の効いたヘフライイング・タイガースに乗っていたのだ。いきなりの気温変動で体調を崩す者もいよう。

全員に健康管理を徹底させるよう小隊長に通知してくれ」

「了解。ただちに着手します」

敬礼と同時に伊庭は身を翻した。そのきびきびとした動きに、天津3佐は頼もしさを覚えていた。

こうでなければ、遅れた予定など取り戻せはしないと……。

2 内乱

陸上自衛隊のPKF部隊を乗せたヘフライイング・タイガースが上海に到着したのは七月であつた。

そして現在は一二月だ。長江を遡航し、武漢にたどり着くまで五ヵ月かかったわけではない。その大部分は廃都となつた上海にて待機を余儀なくされていたのである。

日米と国連は圧力をかけ続けたが、北中華人民共和国はいったん了解したPKF部隊の武漢